

## 地域推薦枠医学生 夏季離島実習 2018 ～沖永良部（朝戸医院）～

8月19日から24日まで、沖永良部和泊町にある朝戸医院での実習を行わせていただいた。昭和57年に朝戸末男先生が開院され、現在息子さんの俊行さんと親子二代でやられている。親から子へと受け継がれ、地域に根差した医療をされていた。検査機器はとても充実しており、先生曰く、検査のためだけに島外に行くのは大変、また、検査ができないことは不安が残り、患者、医師どちらのためにも検査機器の導入は行うべき、離島だからこそ少し無理をしてでもとの考えだそう。離島には、特定診療科がない場合もあり、学生時代から貪欲に学んでいくことが大切だと教わった。特に急を要する疾患は見分けられるように学ぶ必要があると感じた。今ではインターネット中継で学会にも参加することができ、患者のレントゲン画像などもデータを送り専門の先生に診てもらうことも可能になっており、時代の進歩を実感した。院内すべての電子機器はすべて先生自身が配線接続されていて、異常にもすぐ対応できるようにとのことだそうで私自身驚いた。薬剤師の方からも助言を頂き、薬の合う合わないなどを、患者が意見しやすい雰囲気を作ることを大事にしてほしいと言われた。また、先生も薬剤師の方を信頼されていて、良い関係を築かれているなど感じた。介護の面では、沖永良部の高齢化率も増してきていて、近年介護する側が倒れていると、課題は大きなものだ。また、離島では例えばソーシャルワーカーなど全ての業種がいるわけではなく、代わりを医師が務めるため、医師に求められる仕事が多岐にわたると学んだ。デイケア、施設見学では、沖永良部の方とお話することもでき有意義な時間であった。今の時代、病気を治すだけが医者ではない、皆がいかに健康でいられるか、また、介護の面も考える必要があると先生がおっしゃっていて、心に残った。

地域医療診断では、和泊町の資料館で特産品のゆりについて、西郷隆盛と沖永良部の深い関わりについてなどを学び、日本一と言われている国頭小学校のガジュマルを見て、昇竜洞へ行き鍾乳洞に感動した。ウジジ浜、フーチャ、田皆岬、ワンジョビーチと透き通る海にもたくさん触れる機会があり幸せのひと時であった。

今回、自治医科大学の学生とも一緒に実習に参加し、将来、同じ地域医療を担うものとして、学校のことについて、将来のことについて意見交換でき、ありがたい機会でもあった。

～思い出の一句～ 「西郷どんの ゆかりの地踏み チェストいけ！」

今回、和泊町立西郷南洲記念館見学で、西郷隆盛についても学ばせて頂き、沖永良部との関わりが深いということが分かった。医療の面でも、まだ少ない知識ではあるが、昨年よりもより多くを学び感じる事ができた実習となり、これからもこの経験を忘れず頑張っていこうと強く思い、また、2018年NHK大河ドラマ「西郷どん」にちなんでこの句を詠んだ。

## 地域枠医学生 夏季離島実習レポート

私は今回、沖永良部島の朝戸医院にて実習をさせていただいた。船に約18時間も揺られながら初めて足を踏み入れた沖永良部は、私が想像していた以上に魅力的な場所だった。確かに田舎だという印象は大きく受けたが、行く先々で地元の方々があたたかく声をかけてくださり、解放的な住民性を感じることができた。何より島のどこから見ても海が本当に綺麗で、終始癒されながら心穏やかに過ごせた5日間であったと思う。

病院実習では、外来見学や通所リハビリテーションでの交流、リハビリテーション見学、往診、老人ホーム訪問など様々な体験をさせていただいた。私の中で特に印象的だったのは往診である。そこでは旦那さんのお母さんと奥さんの2人が暮らしており、亡くなった旦那さんの代わりに奥さんがお母さんの介護をしていた。血のつながりはないのだが、「おばあちゃんに恩返しをしたい」と明るく朗らかに介護をする奥さんの姿にとっても感銘を受けた。朝戸先生とも強固な信頼関係が築かれており、往診の中でおもてなしもさせていただいた。私の中で、地域医療を担う医師は患者の病気のことだけでなく、その家族や患者の人生についても熟知しているというイメージがあったのだが、朝戸先生の姿を見てそれを実感することができた。患者との信頼関係や友好を深めていくにはそれなりの時間がかかるとは思うが、しかしそれこそが地域医療の醍醐味なのではないかと改めて感じた。私もいつかそのように地域との関係や人々とのコミュニケーションを大切にできる医師になりたいと思う。また、今回の実習で新たに学んだことは、離島や僻地で在宅医療を行うことは困難であるということだ。家で病と闘う患者の中には、生活の中で介護を要する方が多い。しかしそういった地域では介護を担う年代の人が手薄だという現状がある。また病院間の距離が遠い場合はとても効率が悪く、医師の負担にもなりえる。患者のことを第一に考えながら、そういった困難に対処していく必要があるのだと感じた。

実習の合間に沖永良部の観光地をたくさん巡ることができたのは、本当に良い思い出となった。ワンジョビーチで泳いだり鍾乳洞を見学したりと、自然と思い切り触れ合うことができた。また、地元の郷土料理に舌鼓を打ち、マンゴーやドラゴンフルーツ、グアバなど南国ならではのフルーツも満喫することができた。

今回の実習を通して、将来目指すべき医師像を少し思い描くことができたように思う。それを忘れず、今後の学習に励んでいきたい。

### 俳句

碧き目で 繋げる命 何処でも

「碧き目」という部分は、沖永良部の海がエメラルド色でとても綺麗だったことが印象的だったので、先生方の目にその碧色が映っている様子を表現した。俳句全体としては、離島という人材や医療資源の限りがある環境の中にあっても、自分たちでできることを広げて地域の人々の生活、そして命を守ろうとする先生方の姿に感銘を受け、この句を詠んだ。